

「今、私の晴雨計は！^{②⑥}」

「北という国」1

平山征夫

「北の国」といっても倉本聡のドラマではない。北朝鮮という国のことだ。

このところ「金正男氏暗殺事件」で注目されている。何でもありの独裁国家だが、それにしても空港という衆人環視の場で日本のテレビ番組を装うとは大胆なやり方だ。初代金日成以来自己の地位保全・独裁体制維持のため仲間・同志を次々と暗殺する歴史を刻んできた国だが、それにしても金正男という後継には全く野心がない母違いの兄

を暗殺するとは衝撃的だ。亡命政権にかつがれるのを惧れたようだが、疑心暗鬼もここまでくると哀れだ。尤も、北朝鮮だけでなくスターリンをはじめ独裁者は古今東西似たようなものだ。

終戦のどさくさに半島の共産化を狙って、ソ連が「伝説の抗日戦線の英雄・金日成」をでっち上げ、傀儡政権を打ち立てたことは、当時そのことに関与したソ連軍将校の証言で自明だ。この創られた歴史が二十一世紀の現代において「北」という国として日本のすぐ近くにまだ存在すること自体不思議だ。これも大戦と冷戦が生んだ人間の過ちであり不幸だ。

一昨年、韓国の韓半島未来財団主催の「韓半島統一問題」のシンポジウムに招かれて出かけたが、二つの国に実質分断されて68年、休戦協定から63年という長い年月が経過し、生き別れたままの人々の高齢化が進む一方、統一への熱意は低下しているように感じた。その理由は、①政治体制が異なりすぎる、②経済格差が大きすぎる、という二つの理由だが、もう一つ③米、中とも統一を望んでいない、ということも作用している。両国の人口と一人当たりGDPなどで推測すれば、統一には韓国側の負担が大きく、均一化するには韓国側は一人当たりGDPレベルを三割以上ダウンさ

せなくてはならず、ドイツの比ではない。だから「次の世代の課題」というのが今の韓国の大多数の意見。米中も北というクッションがなくなり国境で両軍が直に接するという軍事的緊張を避けたいという思いがあるし、何といっても中国には北の崩壊による大量の難民発生への強い危惧がある。だから、核開発や弾道ミサイル実験などに対する国連制裁決議が出されても「生かさぬよう殺さぬよう」を対北方針とする中国は対応が生ぬるくなる。

そのシンポジウムでは、思いの外、統一に慎重かつ消極的な意見が多かったので、思わず「政治体制という障害要因がク

―データなどで現政権が倒れ無
くなくても、経済的要因を理由
に統一を見送るのか」、「経済的
負担が問題なら、分断の原因を
作った米、口はじめ中、日など
が合同で「統一支援ファンド」
を創成して広く対応すべき」と
発言したが・・・。質問の最後
に手を挙げてよろよ一人の老
人が出てきた。そして「私は朝
鮮戦争の生残りの軍人だ。いつ
まで生きるか分からないが、何
としても北にいる仲間と逢って
から死にたい。日本から来た人
に伺うが、拉致問題を抱える日
本政府も韓国政府も「北」に対
して弱腰すぎないか？」と質問
してきた。「北」という国に対
し新潟は特別の関係にある。大

戦後、日本から北に帰る人々
が、北送船に乗って「万歳」の
歓呼に送られて出発したのが新
潟港だからだ。「北送」という赤
十字事業を受ける港が他になか
ったところ、当時の新潟市長が
手を挙げたのだ。しかし、この
帰還は極楽黄土という宣伝とは
全く異なり、北の生活状況は酷
いうえ、帰還者に対する北の扱
いはスパイ容疑そのものでその
後日本人妻はじめ多くの悲劇を
生んでしまった。

た。日本から北への唯一の直行
ルートであった「万景号を止め
ろ」と言って、港湾管理者の私
を襲った右翼に頼に「たこ焼き
返し」で傷つけられた話は前に
書いたが、他にも沢山のエピソ
ードがある。

ようになり私と顔なじみになっ
た。ただ新聞記者の彼は関係本
を読んでいるだけでは収まら
ず、現地視察に出かけるように
なった。後で分かったのだが、
そんな彼に高教組から案内の依
頼が来て出かけたのが彼にとつ
て六回目の訪朝だったが、その
旅の途中でスパイ容疑で逮捕さ
れた。

新潟県知事として訪れた韓国
で何度も「新潟という地名を聴
くと複雑な思いになります」と
言われたのはそのせいだ。他に
も新潟県知事ゆえに「北」に関
係した事件等に幾つも遭遇し

たら「折角集めた北朝鮮関係の
本が燃えてしまったのが一番残
念で…」との答えだった。S氏
もそうした一人。北に関心を持
った彼は新潟県が主催する「北
東アジア経済会議」に参加する

「北東アジア経済会議」に彼
の顔が見えなくなって気にして
いたが、三年くらいして突然会
議に現れた。聞けば二年二か月
北に抑留され、取り調べを受け
ていたのだという。肉体的拷問
はなかったが夜中までの尋問等
はあったそう。本人は「もう少し
しいれば語学をマスター出来た

のに・・・」と軽口を叩いていたが、逮捕時は相当不安だった

ようだ。スパイ容疑の原因を聴くと「六回目の訪朝前に、日本の公安に呼ばれて北で見たことなど情報提供を求められた。それが原因だろう」と言う。驚いたことにその時日本の公安に説明のため提供した写真や資料が、北での尋問の際「これはお前が提供したものだろう」と突き付けられたという。日本の公安から北に情報が筒抜けなのだという。それを告発するべく彼は「北朝鮮抑留記―我が闘争二年二か月」を執筆、出版している。そうした彼の行動を抑えるための脅しか、ある日「留守中

の家に何者かが侵入、家探しされた」こともあるそうだ。

この異常な体験は極めて貴重な体験でもある。何故なら“北”と言う国は未だに異常かつ良くわからない国だからだ。前世の遺物のようなこの国は、あの独裁者の元でこれからどんな歴史ドラマの舞台になるのだろうか・・・。

(平成二十九年三月二十八日)